



～浅水管理を徹底して、分けつを確保してください～

1 生育状況（6月10日現在）～草丈は平年並、茎数は平年より少ない～

○6月10日現在の生育状況（あきたこまち、5地点 表1 水稻定点調査結果（管内5地点 あきたこまち）平均）は、草丈は24.9cmで平年比97%、茎数は114本/㎡で平年74%、葉数は6.3葉で平年差+0.1葉です（表1）。

○田植え作業の盛期（50%経過）は5月22日（平年差±0日）でした。5月中旬は高温・多照でしたが、5月下旬～6月上旬の気温は平年並で、日照時間は少なくなったため、分けつが抑制され茎数は平年より少なくなったと考えられます。

	草丈 (cm)	茎数 (本/㎡)	葉数 (葉)
本年	24.9	114	6.3
前年	22.2	102	5.7
平年値	25.8	155	6.2
平年差 (%、±)	97%	74%	+0.1

6月10日調査

○また、5月中旬以降の気温は平年並～高く、5月3～5半旬の降水量は少なかったことから、藻類や表層はく離の発生がみられています。

○1か月予報（仙台管区气象台6月11日発表）によると、東北地方の向こう1か月の気温は、高い確率が50%となっており、降水量は平年並か多い見込みです。

2 今後の管理のポイント

水管理により分けつの発生を促進し、茎数の確保に努めてください。

令和7年の収量は平年並でしたが、穂数が平年よりかなり少なくなりました。昨年は田植え直後に低温があり、初期分けつが確保出来なかったことや、近年減少傾向にある栽植密度の影響によるものと考えられます。田植え後は、適切な水管理により稲の生育促進を図り、茎数確保に努めてください。

目標茎数を確保したら、速やかに中干しへ移行し、倒伏しにくい稲体づくりを行ってください。

①分けつの発生を促進させる水管理の徹底

○浅水管理（水深2～3cm程度）を徹底して、分けつの発生を促進しましょう。

○分けつの発生は、昼夜の水温差が大きい場合に促進されます。このため、入水は水温の低い早朝に行い、日中は止め水とし、水温の上昇を図ります。

②還元（ワキ）対策

○気温が上昇すると、土壌還元（ワキ）が起こりやすくなります。ほ場に足を踏み込んだ時に気泡が発生し、下葉の黄化が見られる場合は、短期間の落水や水の入れ替え等を行い、根の健全化に努めます。

○落水する場合は、除草剤やオリゼメート粒剤等の散布後日数に注意してください。周辺環境へ配慮し、散布後7日間は止水管理とし、落水はしないでください。

③藻類・表層はく離対策

○アオミドロ等の藻類や表層はく離の発生が多くなると地温や水温が低下し、生育が抑制されるため適切な対策を行ってください。

○アオミドロ等の藻類や表層はく離の発生が多いほ場では、気温の低い早朝や雨の日に水の入れ替えを行ってください。水管理だけで十分な効果が見られない場合には、中耕機によるかく拌や藻類・表層はく離に適用のある除草剤を散布してください。

④適期中干しによる弱勢茎の抑制

- 中干しは、弱勢茎（穂になりにくい茎）の発生を抑制するとともに、根の活力を高めて1穂粒数と千粒重を増加させる効果が期待出来ます。また、中干しによって、節間伸長が抑制されることで倒伏軽減が期待できます。
- 目標穂数と同数の茎数（70株植で20～22本/株程度、60株植で24～25本/株程度）を確保したら直ちに中干しに入りましょう。中干しの期間は7～10日程度で、軽く足跡が付く程度（亀裂が1～2cm程度）を目安とします。生育が遅れ、茎数が確保できていない場合は、中干しの開始時期を遅らせてください。
- 中干し始めに溝きりを行うと、その後の水管理や秋作業がスムーズにできるので、積極的に行ってください。

【カドミウム吸収抑制対策について】

- カドミウム吸収抑制対策として行う出穂3週間前から出穂3週間後までの長期間の湛水管理に備え、中干しは遅れないようにしっかりと行ってください。
- あきたこまちRはカドミウム低吸収品種であり、対策期間中の湛水管理は必要ありません。そのため、中干し終了後は間断かん水とします。

3 除草剤（中・後期剤）の適性な使用

- 中・後期除草剤の使用にあたっては、雑草の草種や生育程度に応じて適切な剤を選択してください。
- 散布時期や散布時の水管理は、薬剤によって異なるので、ラベルをよく読み適正に使用してください。

4 主要病害虫の防除対策

①いもち病

- 令和7年は穂いもちの発生が多くなりました。本田では、葉いもちの発生を防ぐことで、穂いもちの被害を未然に防ぐことが出来ます。以下の点に注意して葉いもち予防をしてください。
- 葉いもち防除は、箱施用剤や側条施用剤を使用していない場合、6月15日頃（6月12～18日）に、オリゼメート粒剤を10a当たり2kg散布してください。
 - 補植用の余り苗は葉いもちが発生しやすい状態になります。周辺ほ場への強力な伝染源となりますので、補植終了後は、水田の泥の中にしっかりと埋めるなどして、完全に処分してください。

②斑点米カメムシ類

- 斑点米カメムシ類は、着色粒（斑点米）発生の原因となり、米の品質低下を助長します。管内でも、例年、斑点米の発生による品質低下が多く見られます。
- 斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ）は、休耕田や畦畔等のイネ科雑草で増殖し、これらが水田に侵入して加害することから、着色粒の発生低減に向けて、雑草防除を徹底しましょう。
- 農道・畦畔の草刈りは稲が出穂する15～10日前までに数回行い、斑点米カメムシ類の密度低下に努めましょう。
 - 本県の主要な加害種であるアカスジカスミカメは、ホタルイ等のカヤツリグサ科雑草やノビエが水田内で発生していると、その雑草の穂に産卵し増殖します。一発処理除草剤で水田内の雑草を抑えきれなかったほ場では、中・後期除草剤を適切に使用して、水田内の雑草防除を徹底しましょう。

③イネドロオイムシ

- 一部防除圧の低い地域で増加傾向が見られます。育苗箱施用剤や側条施用剤で防除を行っておらず、下記の基準を超える発生が確認された場合は防除を行ってください。
- 産卵盛期（6月上～中旬）の卵塊数が1株あたり0.5個以上の場合は防除が必要になります。6月中旬のふ化盛期に登録のある茎葉散布剤で防除を行ってください。

熱中症対策には環境省の熱中症予防情報サイトを活用下さい



※クマにご注意下さい
クマに関する情報は
こちらから



秋田米栽培情報LINE
県内の水稻生育状況や水稻・大豆の技術情報、異常気象対策などの情報を発信しています。

